

第20回

ハンセン病問題に関するシンポジウム

～人権フォーラム2021～

「高校生によるハンセン病回復者への聞き書き」作品集

主催…厚生労働省、法務省、文部科学省、全国人権擁護委員連合会
共催…全国ハンセン病療養所入所者協議会、

ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会、
ハンセン病違憲国賠訴訟全国弁護団連絡会

後援…日本皮膚科学会、日本ハンセン病学会、ハンセン病市民学会

人から人へ ～佐藤勝さんから学んだこと～ …………… 5

語り手 佐藤 勝 松丘保養園入所者自治会会長

聞き手 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

高橋 美月 塩川 愛 永井 翔大 大下 真緒

今日帰らないでここにいろ …………… 11

語り手 柴田 すい子 ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会副会長

聞き手 筑波大学附属坂戸高等学校 2年

中島 ちなつ 長谷川 綾 森 怜奈

命をかけた怒り …………… 17

語り手 豎山 勲 ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会事務局長

聞き手 東京都立国際高等学校 3年

井口 夏萌 内村 颯花 丸山 莉加

未来へのバトン ～その時までには、私たちが～ …………… 22

語り手 中尾 伸治 長島愛生園入所者自治会会長

聞き手 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

藤尾 菜津 長谷川 てまり 岡田 有莉 山中 彩也花

池田 和音 松葉 悠乃 原田 栞里

記憶し、記録し、継承する …………… 29

～森和男さんと、過去、今、未来を見つめて～

語り手 森 和男 大島青松園入所者自治会会長 全国ハンセン病療養所入所者協議会会長

聞き手 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

酒見 知花 伊藤 咲夢 延 泰世 野田 百花 瀬尾 啓生 川原 愛梨 日野 由唯

人から人へ 佐藤勝さんから学んだこと

語り手 佐藤 勝

松丘保養園入所者自治会会長

聞き手 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

高橋 美月 塩川 愛

永井 翔大 大下 真緒

■自己紹介

青森の松丘保養園自治会会長の佐藤勝と申します。私は今、青森で生活しておりますけど秋田県出身です。昭和23年の5月21日生まれます。

■子ども時代

子どもの頃は、夏は夏で野球をやったり、色んなことをやりまし



たね。冬は相撲を取ったりしていました。しょっちゅう負けましたけどね。スキーを買ってもらって、スキーもしましたね。その村の幼友達とよく遊んだのは、時代劇ごっこですよ。学校から帰ると、ランドセルを放り投げてすぐに遊びに興じていました。

■ハンセン病と分かったきっかけ

男の子はみんな同じような遊びをしたと思うんだけど、私は他の人がやらない、高いところから飛び降りるっていうのが得意な子どもだったんです。

小学6年生の時、垣根から飛び降りようとした瞬間に、足に力が入りますから垣根に両足もろとも突っ込んで、地面にたたきつけられました。その時に多分、ケガしたと思うんです。ケガしたけども、その時は痛くもなるともなかったもんだから、大丈夫だと思って、そのまんま遊びに興じていました。夜、床に就こうとしたときに、傷口が見つかって「なんで俺は痛くないんだろう。」と、不思議に思いました。それで、横手市内の小さな病院に行つてハンセン病ではないかと疑われたのがきっかけです。

■ハンセン病と言われたときの心情

病院からの帰り道に、お袋から「お前の病気はお父さんと同じ病気だ」

と言われました。そりゃ、ショックでした。父親がハンセン病だったの
で、それがどんな病気なのかっていうのは子どもでもありませんが分かって
ました。だから、自分もこういう風になっちゃうのかなって、生きていく
術がそこでなくなってしまう感じがです。それからこういう風にして我が
家に帰ったのか、分かりません。頭の中は真っ白でした。

■将来の夢

我が家の近くに線路が通っており、毎日SLが走るのを見ていました。
遊び場も線路上なんですよね。幼友達を誘って、線路で何本、地に足を
つかないで渡り切れるか、競争したり、SLが来たのを聞いて、鉄橋の下に
もぐったり。そんな遊びが多かったです。それで徐々に蒸気機関車の機関
士になりたいと思ひまして、夢を抱いていました。でも、病気になる
その夢は碎かれました。生きる目的がなくなつたというか。蒸気機関車の
運転手になることが一番の目標で生きてきたので、生きていく楽しみが全
部一気になくなってしまいました。

■幼友達は家に来なくなつた

ハンセン病と分かつてから、昨日まで一緒に遊んでいた幼友達が全く遊
びに来なくなりました。何か用事の途中で会つたとしても、もう遠ざかっ
ていく感じ。昨日まで一緒に遊んでいた幼友達がそういう風にするもんだ
から…。ショックでした。

■妹の差別

私がハンセン病になつたことで小学校3、4年生だった妹は通学拒否さ
れました。母は、妹は病気でないのに通学拒否とはどういうことかと、学
校に乗り込んで抗議しました。妹は学校へ通えるようになりましたが、妹

の心が傷ついたことは大きな「しこり」として残りました。私に対して口
も利かなくなつてしまいました。妹は、私が病気だから学校に行けなく
なつたんだというようにずつと思つてましたから。でも、結婚して子ども
が生まれてようやく許してもらえた。お兄さんに対して悪いことしたん
だつていうことを、ちらちら言っています。妹は旦那さんにも私がハンセ
ン病だつていうことを話しておつて、もちろん理解した上で結婚はした
し、旦那さんの運転する車で家族ぐるみで遊びに来てくれたこともありま
した。

■入所するまでの2年間

小学校卒業間近にしてハンセン病だということが分かりましたから、来
春からの中学校への進学は許してもらえず、泣き泣き学校は諦めざるを得
ませんでした。学校に行くことも出来ないし、昨日まで遊んでいた村の幼
友達とも遊ぶことができなくなつてしまい、まさに「孤立無援」状態でし
た。で、そのまま約2年間、家の中に閉じこもっていました。外へ出るの
も日中はほとんどありません。外に出るとしたら夜に、家の周りをぐるぐ
ると歩くことしか出来ませんでした。ただ一人で外に出てじつとしてい
るのも、友達がいないさみしさから本当に情けなくなつてしまいました。泣
きたくなつたときもあります。ただ我が家の茶の間から見える、鳥海
山^{注1}が唯一の話し相手というか、いつも私の生きがいでした。

そのような状態で2年間家におつた間、「こういう病院がありますから
入院しませんか」と県の保健所の方が度々訪問して来ました。しかし、頑
固なおやじは受け入れようという感じではありませんでした。

注1) 鳥海山

山形県と秋田県に跨る標高2,236mの活火山。日本百名山・日本百景の一つ。

■父は火葬場の使用を拒否された

病気で病んでいたおやじが夜中にぽっくり亡くなりまして、まずは葬儀をするために準備が進むわけでありませうけど、火葬場の使用を拒否されてしまいました。途方に暮れました。やはり葬儀をしない訳にもいきませんので、泣きながらそのまま先祖の墓に埋葬することになってしまいました。お父さんがハンセン病だというだけで、火葬してもらえなかったことの怒りは今でも消えてないですね。

■私たちに償ってもらいたい

ハンセン病になったことで残された家族は話をしないだけで、自分より苦しんできたと思います。残された家族も被害に遭ったりとか、被害は私たちハンセン病回復者と同等。だから補償されて当然だと思えます。むしろ、少ないんじゃないかと思えます。私たちに償ってもらいたいというのは正直あります。

■入所当時のお話

保養園に行くことになったのは昭和38年の4月です。当初は眉毛が抜けていたのと、右手の下垂があった程度でした。でもやはり病気も進行してしまい、子どもながらも神経痛で手の指が曲がるようになってしまいました。どうすることもできなくなってしまう、とうとう青森の保養園に行くことになりました。おふく



自治会事務所での佐藤さん

ると妹と保健所の方の引率で保養園まで来ました。保養園に入った途端、「ああ、俺はこのまんまここで永久に生活していくのかな」と思ったら悲しくなってしまうほどです。することもできなくなりました。一緒に来たおふくると妹は一泊して次の日に帰っていき、その時はもう一生会えないものだと思います。しかし、私の症状が軽かったために「お正月とかに秋田の家に戻ってきてもいいよ」と言ってもらえました。

ので帰ることが出来ました。こうして気軽に会えるんだと思ったら治療も頑張ることが出来ると思えました。しかし、保養園に入ってしまった以上そう簡単には帰ることはできませんでした。

■3年間の病棟生活 保養園の同級生との別れ

保養園では、ハンセン病患者のための学校に通い始めましたが、すぐ高熱を出してしまいました。少しずつ障がいが出てきて、病気の本当の怖さというのは病気になってその時に感じたものです。病棟で約3年間ご飯を食べることもできず、点滴治療だけで何とか生きると言う状態でした。あとは天井を見るだけ。痩せ細って15歳の頃の体重は、何と38キロでした。隣の人はみんな爺ちゃん。話が合いません。楽しめるのは、ラジオくらいでした。ラジオと言ってもね、今の電池のラジオじゃないんですよ、ゲルマニウムラジオ。それで電波を拾って聞くだけでした。そして、保養園の同級生達とも一緒に勉強することができなくなってしまうまし



入所した後、最初に入居した「松丘寮」の跡地

た。私以外に女の子が3人いましたが、仲良かった友達は岡山県の長島愛生園にある新良田教室^{註2}に行きました。私も病気が治っていたら行くための勉強をしていたと思います。でも毎日のように40℃近い熱を出しているもんだから、勉強どころではないですね。

注2 新良田教室

岡山県の国立ハンセン病療養所長島愛生園にあったハンセン病患者のための唯一の高等学校。全国の療養所から生徒が集まった。

■一般寮での先輩との生活

3年いた病棟から、寮舎に移ることにになりました。入室した際は児童寮でありましたけども退院した時にはもう一般の寮に入るようになっていました。子どもたちは皆、岡山県の新良田高校に進学していききましたから、そこには誰もいませんでした。だから、まだ20歳になりませんでしたけども一般寮に入り、大人たちと一緒に生活してきました。15畳の部屋で、一緒にご飯を食べて寝食を共にする部屋でした。もう若い人は誰もいませんから、自分よりはるか大先輩たちの中の生活になりました。



成人後、15畳の雑居生活をした「静風寮」の跡地。2階建ての木造建築だった。現在は、桜の苗木が植えられている。



新城小中学校二葉分校の中学校の跡地。現在はゲートホール場になっている。ここから、保養園の外にある新城中学校の本校へ通う生徒が見えた。

■母との関係

病棟に入ると会うことはできませんでしたが、一般寮に移った時、母は少なくとも1年に1回は来てました。日帰りじゃなくて一晩泊まって帰ることもありました。今みたいに、携帯とか電話とかありませんから、「何月何日に行くから」という手紙をもらっていました。会えないと思っていた母親が来たから子どもでも嬉しかったですね。お金があんまりないのに来てくれたと思うと、やっぱり親はすごいなと思いましたね。

■母の存在

母にはやっぱり一番、苦労かけたな。父親がハンセン病で後を継ぐ息子もハンセン病だった。大変な苦労をして来たんだろうと想像はできます。だから、さまざまな困難にもますます負けておられないというような強みも含めて、格好良いですね。尊敬しています。自治会活動で稼いだお金は貯めておいて、全部ではないけれど母にいくらあげたと思います。自分のためには使っていません。

■友人との再会

らい予防法^{註3}廃止後、数年経ってから実家に帰ることができました。その時に会いに来てくれた人が2人おられます。びっくりしましたよ。60歳前ぐらいかな。ですからいいお爺ちゃんですよ。一升瓶を抱えてきました。乾杯というわけにはいかないけどやりました。子どもの頃、いじめられてきたことが解消されたというか、その2人だけですけどね。

それからね、同級生の村の役員さんに一度会ったことがありますね。母に頼まれて用事で役所へ行った時、近づいてくる女の子がいました。どうしたのかなって思っていたら、車の窓を開けて「お茶飲んでいかないか」

て言うからどこの人かなと思ったら、同級生の女の子でした。自分だと分かった上でそう言ってくれたのか分からないけれど、とにかく嬉しかったですよね。声を掛けられるなんて思ってもいませんでしたから。

注3) らい(癩) 予防法

昭和6年(1931年)に成立した、ハンセン病患者の終生絶対隔離を定めた法律。この法律のもと、各県で患者を見つけ出し、療養所へ送り込む無らい県運動が始まりました。らい予防法は平成8年(1996年)に廃止された。

■入所者の高齢化

保養園の入所者の平均年齢は87歳。昔だったら外で、畑を作ったりしてた人が結構いたもんだけども、今は誰もいません。それだけ、年を取って体が不自由になってしまったということですね。さみしいですわなあ。自分の親が居なくなっているような感じがしますからな。

今保養園で語り部をしているのは私だけです。結構昔から保養園を任せてた大ベテランが亡くなってしまって、残念ですけども今私が一人だけです。だから今のうちに、お話しできないかなと思つて。

■納骨堂

納骨堂に入っている方が今、1155名おられます。その人たちのふるさとに帰りたいという思いがなほか強かったかと思うと、心が痛みます。一番苦しんできた人たちが、今の豊かな生活を経験することなく、旅立ってしまったからです。ね。そういう人たちを思うと、私は



納骨堂前にて。納骨堂には毎日のように花がたむけられている。

ここで大声を出して笑っていいのかなというふうな思いもあります、正直。でも、毎日悲しんでばかりいられませんから、前向きに明るくみんな協力しております。私たちは最後の最後まで守っていかないと。

■これからの目標

15歳で入所した私は先輩達のおかげで、今の自分がいるんだということ思いながら恩返しのもりで自治会の会長をしています。だから自分のことは二の次です。自分は代表だから言いづらいこともやっていかなければならない。例えば建物が壊れたとか、お医者さんがいないとか、看護師さんが少ないとか。そういうことを国に訴えて働きかけなければならぬ。特に納骨堂や宗教施設、社会交流会館がありますから。納骨堂はもちろん永久に残さなければならぬ。宗教施設は、人々の心を休める場所でもあったわけです。社会交流会館は地域の人達の交流の場所でもある。今そこでは活動できないけども、保存していく。そういう建物は残してい



松丘保養園に残る古い建物の一つ「楓林寺」



社会交流会館前にて

【聞き書きを終えての感想】



この聞き書きプログラムを通して、佐藤さんの優しさに触れ、その人生から多くのことを学ばせていただきました。ハンセン病になった。それだけで、愛する家族や故郷から引き離されました。時に厳しい表情で語られた差別のお話が頭から離れません。多くの人々の大切な人生を奪った終生絶対隔離政策、社会からの差別は絶対にあってはならないことです。私たちは誰しも心の中にある差別の心と向き合い、正しく知って正しく行動しなければなりません。

厳しい差別の中で、ご家族や先輩方に支えられていた佐藤さん。今度は人から人へと、受け取った愛を多くの方々に繋げられています。私たちも佐藤さんから深い愛をいただきました。タイトル「人から人へ～佐藤勝さんから学んだこと～」にはそんな意味が込められています。

今、入所者の高齢化が進んでいます。松丘保養園の語り部は佐藤さん一人だけとなりました。私たちには、そんな今だからこそ、ハンセン病問題から学び、回復者の方々の声を後世へと伝えていく使命があります。佐藤さんと出会えたことは私たちにとって、一生の宝物です。どんな時も私たちにまっすぐ向き合ってお話をしてくださった佐藤さん、そしてこの聞き書きプログラムに関わってくださったすべての方々に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



profile

佐藤 勝

さとう まさる

1948年5月21日・73歳

松丘保養園入所者自治会会長

【略歴】 小学校6年生でハンセン病を発症。父から保養園への入所を反対され、2年間自宅で過ごした後、病状が悪化し松丘保養園へ入所。入所して間もなく、さらに病状が悪化し病棟に入所したが、回復後一般寮に移った。その当時の保養園の先輩に恩返しをしたいという思いで、現在松丘保養園の自治会長として活動されている。また保養園の唯一の語り部として今まで自分や家族に向けられた悲しい差別や保養園での生活を後世へと伝えておられる。

今日帰らないでここにいます

語り手 **柴田 すい子** ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会副会長

聞き手 筑波大学附属坂戸高等学校 2年

中島 ちなつ 長谷川 綾 森 怜奈

■自己紹介

私の名前は柴田すい子です。1936年7月2日、6人兄弟の下から2番目に生まれました。現在85歳。旦那は亡くなり、現在は1人暮らしで、東村山市に住んでいます。出身は横浜です。鶴見区に住んでいました。幼少期の頃は天真爛漫で、ほとんど家にいなくて、外で遊び呆けていましたね。特に向かいの家の女の子とよく走り回ってたね。



■小学校から中学校まで

小学校、中学校は入間川小学校、入間川中学校に通ってました。小学校の頃は第二次世界大戦真っ最中で、学校に着いたらサイレンが鳴ってそのまま家に帰ることもありましたね。中学校の頃は籠球部と数学部に入っ

てね、すごい学校が楽しかった。弟と仲が良くて、よく2人で近所の商店街に遊びに行っていたね。

※籠球部：現在のバスケットボール部

■すね火傷

私は入園する時、自分がハンセン病ということ知らされていなかったんですよ。ハンセン病の事について自分も友達も家族も何も知識がないから。だから、授業で体操の時は、靴履いて外に行くんだけど、紐を結ぶのが大変だったり、ハードルでも足ひっかけたりして、おかしいおかしいとは思っていたんだけど、何の病気が分からなかったね。今思えば、もう麻痺が進んじやっていたんですね。でも友達はそんな自分をよくフォローしてくれたね。

中学2年生の1月だったかしら。中学校のグラウンドのわきにあったゴミ焼の所で、すねを火傷してしまっただけです。病院に行ったら、多磨全生園に行くように言われたんです。その足で父親と全生園に来て、病気がって知らないでそのまま全生園に入っちゃったの。その時私は、早く病気を

治して、この全生園から出たいから「今日帰らないでここにいろ」って言ったんですよ。それで、そのままもう、ずっと一生出られないことになってしまっただけ。

■多磨全生園に入園

入所した当時は、自分以外みんな大人で、もうどうしていいかわからなくて、なんか深い穴に落ち込んでいくような気持ちでした。もう親にも会えない、学友にも会えない、先生にも会えないで。でも、親たちは最初の方は面会に来てくれた。けれど、だんだん洗濯ものも職員が「持って帰っちゃダメ」って言ってきたから、遠のいていったけど。でもあだし自身も母に向かって「もう来ないで」って言ったことあるの。親が来るとね、家の方に頭が行っちゃって。共同生活するの私、大変だったのよ。自分としては、その大変な生活をしなきゃならないのに、頭は家族の方に飛んで行っちゃったらさ、収集つかないじゃない。だから「来ないで」って言ったことあるね。

その時の母の反応を見るゆとりも無かったね、自分で精一杯だったから。でも私の母は、「変われるものなら変わりたい」って言ってくれていたね。

全生園に入ると、すぐに名前変えられちゃうのよ。私なんか子どもだったから、「今日からこの名前で行きましょう」って言われても、反応しない子だったから。それで、その入った日に名前が違っちゃったから、友達が何回も訪ねてきたけど、名前が変わっちゃっているから、「そういう人はいません」っていうことで帰らされたと思うのよ。そういう効果もあるから名前を変えたんですよ。その人を守るために自治会でやってくれたのか。ちょうど香川京子が、女優さんね、すごく活躍している時だったから、「香川」っていう名前になったんですよ。それで冬に入ったか

ら、「冬子」になったのよ。「香川冬子だよ」って言われたから、そのままずっと。香川冬子で通しましたね。

多磨全生園の暮らしは、4人部屋の小さい部屋で、押し入れも半分よ。半分が自分のもので。少女舎は朝6時に起きて廊下を磨いて、お掃除してね。自分のものは自分で洗濯しないといけないし、全部やんなきゃならない。当番制で、皿洗いかみん必要以上に磨いていましたね。あたし家事労働がだめなのよ。皿洗いは点々って水が残るのよ。そういうのも非難されるから、家事労働はだめだった。それで泣いたね。嫌なことばかりだった。辛いことばかりだった。

その後には学校があつて、私の時は、先生は患者さんだったね。それで、もう足が治って園内の学校に行くようになったら中学3年なんだけど、中学3年の教科書がなかったね。どこからかもらってやるわけだからねえ。ちゃんと学校って言っても認められていなかったのよ。

ただ、新聞ぐらいは読めないといけないってことで、園内の人達が関わって、教えてくれたって感じだよ。

でも、授業はできないから、何学年かまとめて「作文書いてろ」とか、そんな感じね。先生もちゃんと資格のある人じゃないから、数学とか理科とか。数学とか分からないじゃないですか。ただ普通の常識的なことをやっているだけです。だから数学とか全然分からなくなっちゃったね、好きだったのに。

毎日、決まった規則に動かされるから、私なんか本読むのが好きで、夜なんかいつも本読んでたけど9時には消灯で消えちゃうからね、何にも言えないね。悲しくて。おんなじ生活で、1人になるってことがないね。でも唯一楽しかったのは夏にある盆踊りを踊っていた時だったね。園内の行事で、みんなで樽組んでグラウンドでその周りをみんなで踊るんですよ。さらに、園内に盆踊りを教えてくれる人がいて、その人から教わって

踊りまくっていたわね。その時が自分のハンセン病のことを忘れられる時間だったね。

17歳になるとき、一般舎に移るのよ。少女舎から。そしたらそこで、付き添いって言って重症者の面倒を見るのよ。自分のこともできないのに。園内作業って言って全部患者がやってたからね。職員は何もしない。それで、切り回してたから。自分も手の感覚ないし、不自由なのに付き添いが回ってくるのよ。自分のことも出来ないのに、どうして人の面倒見れるのって聞きたかったね。それも言えないのよね。みんな患者。患者が患者を心配してさ。患者がやっていたのよね。

■園内での差別

苦勞も苦勞。あたしなんか泣きたいぐらいよ。全生園には1号さん2号さんって呼ばれる「お母さん」のような存在の人が2人いたんだけど、水冷たいのに雑巾絞るじゃない。1号のお母さんなんか「冬ちゃん手がかわいそうじゃない」って自分ではお湯でやってるじゃない。あと、私あんまり可愛がられなくて、「お母さんお母さん」なんて絶対言わないから。私の後に入園してきた子が「お母さんお母さん」ってくっついて歩いてるから、「えー！」なんて思った。もう拒否反応以外何もないの



よね。「お母さん」なんてこれっぽっちも言えない。言おうとは思ってるんだけどね。そのうち、あたしなんか反抗期だったから、「資格も無いのに」とか何とかがって内心思ってる。そんな感じだから可愛がられない。

面白いことに、療養所って差別がひどいのよね。病気の軽い人は「素敵な人」って見られて、人格と関係なしにね。病気の重い人はね、「ダメな人」っていう感じだったね。結局将来、病気の重い人は看てもらう人で、軽い人は看てあげる方じゃない。もう一生涯いなきやいけないんだから。そういうことが頭の中にあるんでしょね。だから病気の軽い人はとても尊敬されるし、病気の重い人は蔑視されるのよね。だから目の見えない人とかは、特に。退院した時、解放されたと思ったもの。自分は病気が重いほうだから、どっちかというと蔑視される方だから。だけど、あたし、子供のときから病気の重い人の方が、人格が素敵だなって思ってた。そういう差別はありましたね。

■長島愛生園高校設立

最初私が中学を卒業した時に、ずいぶん高校設立の嘆願書を出したんだけど、建たなかったんですね。昭和30年だから19歳の時に高校に行ったの。だから、高校が設立された時には高校を卒業する歳になってたんですけどね。高校は邑久高等学校の分教室みたいになってたから、邑久高校から先生が来てましたね。

高校生活は定時制高校だったんだけど、なかなか学校が出来なかったから、3年半で4年間のメニューをこなすということで結構ハードでしたね。だから、勉強の合間に治療に行くんですよ。それでまた帰ってきて、勉強してって感じでした。若い人ばかりだったから、バレーボールなどをよくしていましたね。3倍くらい男子の方が多いね。女性が少ないのよ。

■夫の出会い

夫とは長島で出会いました。

夫は積極的な人でした。人を大切にする人でしたね。私はどちらかというと内向きな性格なので、周りのちょっと仲良くしている人とだけの範囲だったけれど、うちの夫はすごく積極的でしたね。だから今でも友達に「あんな人いいよ」って言われます。

でもそのお陰で私は今でも寂しくないです。50年近く生活して、色んな思い出があるし寂しい時もいつもそばにいると思っっているの、寂しくないですね。

■社会復帰後

本当は大学を目指して勉強していたんですけど、やっぱり金銭面の問題で行くのは諦めましたね。家とも断ち切ってたからね。弟が私のことを調べて便りがきたけど、迷惑をかけるから何も言わなかったね。

高校を卒業して東京の職業訓練校からコロニーっていう調布にある印刷会社を紹介してくれたね。最初は、蒲田の方の工場で働いてって言われて行ったんですよ。夫は工場で作ったものを運搬する仕事で働いていました。その頃は全然自分の時間が取れなかったですね。ほんとには自分の時間が欲しくて、色々習いたいこともあったんだけど、色々ひたすら働きました



た。でも、夫と2人で社会復帰を目指していたから、退院して働くようになった時は、本当に嬉しかったですね。四畳半の何もない部屋だったけど、毎日働いて自分のお金で買った物でご飯食べて、もう当たり前前のごはんとにすごく嬉しかったですね。そういう事もありましたね。

調布に移動した時も、自分がハンセン病って他の人に言っていないから。差別も何もないわね。でも、少しそういう目では見られたね。2回ぐらい。「何この人？」ってされたこと、あるね。食堂にいて食べている時に、席を飛ばしてこっちに座る、もあったね。そんなぐらいかな。でも私、鈍感だからなのかあまり差別を感じたこと、ないね。途中で、調布から東村山まで通うには遠く、その後に東村山にある同じ印刷会社に移ってそこで定年を迎えました。

■ハンセン病国賠訴訟の原告団となる

定年した2年後に、ハンセン病国賠訴訟の原告団に参加したんですよ。まず夫がなってるね。それに乗じてって感じで。私が原告団になる時は、自分自身社会復帰してもうずいぶん経ってたのよ。だから自分のハンセン病のことはすべて解決したと思っっていたんですよ。だからお世話になった療養所の方のためにやろうって思いましたね。

社会に出て自分は結構改善したんじゃないかという気持ちがあったの。でも、陳述とかやらないといけなかったり、裁判所に行ったりする中で、「自分はすごい被害を受けてきた」と思ったのよね。自分の子どもは持っていない、家族は持てない。ものすごい被害だなんて思った。だから裁判やったってことは、そういう自分に気づかされたね。

原告団は早くになったから、弁護士と一緒にあちこち回ったね。あまりにも被害がバラバラだから、弁護士もどう戦うか戦術を集めるのよね。最初の内は弁護士と一緒に動いていましたね。集まっては草津の方に行った

り、岡山の方に行ったり、それにくっついて動いていましたね。夫婦で、色々なところ行って勉強しましたね。半年ぐらいあっちこっち回りましたね。裁判が始まってからはバスで、原告を乗せちゃ裁判所に行ってたからね。準備期間が短い期間でね。弁護士が色々と頭ひねって戦略を立てていたね。結構楽しかったわ。裁判に勝訴した瞬間は、すごい嬉しかったですよ。あたしは、あの裁判によって、初めて皆さんがハンセン病を少し理解できたと思うんですね。みんな一緒に戦ってくれたから、裁判で戦って、勝利してからは世の中全然変わりましたね。第一、裁判やっている間にどんどん変わっていったもんね。ハンセン病のことを政府によって隠されて、ハンセン病の人がどんな被害を被って、どんな生活をしていたのかなんて誰も分からないじゃない。それを世間の人々が少数かもしれないけれど、次から次へ一緒になって戦ってくれて、ハンセン病っていうのが知られることになったから裁判後の生活がすごくしやすくなったね。

語り継いでいきたい

私たちが経験してきた偏見や差別はこれからも語り継いでいきたいね。国が酷い現実を無視したような予防法を作ったから、悪いんだけどね。それを何年も何年も病気が治る時代になっても続けたから、それを改善しなかったじゃない。それをみんな苦労して被害被って、大変な思いをしたじゃない。そういうことに對して、一般の人は別の人と思っ、自分のこととして考えないじゃない。病にかかった人が悪いみたいになって、攻撃するじゃな



い。それで排除していくのよ。そういうのって、本当に良くないなって思う。もし自分がなったらって考えないと、その病の辛さや苦労さは理解できないものね。だから何年経っても時代は変わらないのかって思うね。自分のこととして考えないものね。自分がかかったらとか考えないとね。なんか他人ごとなのよね。なんか悲しいなって思う。

■今の世界を見て思うこと。

今世界で流行している新型コロナウイルスもハンセン病と同じところは多いわよね。感染していない人も、自分のこととして考えなければならぬのに、コロナにかかった人が悪いみたいになって、攻撃するじゃない。それで排除するじゃない。コロナにかかった人を特別かかったみたいに扱うからね。差別したり偏見したり、するんでしょ。排除したりするんでしょ。なんか他人ごとなのよね。なんか悲しいなって思う。さらに一生懸命にやっている医者とかまで差別されるっておかしいよね。どう考えてもおかしい。

■現在まで

私がかつて活動してきたことに私自身はすべて後悔していないわ。なんかよく頑張ってきたなって思う。だいたいこんなに病気が重くて、社会復帰って考えなかったと思う。もしかしたら今も療養所において香川冬子でいるんじゃないかなって考えたこともあったね。そういう意味では良かったなって思う。自分の名前を取り返して。自分の意志で生きるようになっていったのはね。

〔取材日…2021年2月7日／3月2日〕

【聞き書きを終えての感想】



【中島 ちなつ】

今回長期間に渡り、柴田すい子さんにインタビューをさせて頂きました。そこで私が学んだことが「何ごとも自分ごととして考える」ということです。ハンセン病回復者の平均年齢は80歳を越え、私たち若者は次の世代に受け継いでいく義務があります。しかし、実際にはハンセン病問題について知ってもらう活動をしている人は多くはいません。長期間に渡ってハンセン病問題について深く知った私がこれからすべきことは、ハンセン病問題について知るだけでなく何か活動しようとする人を増やす取り組みだと思います。私は今後もハンセン病問題について多くの人に知ってもらう活動を続けるつもりです。まずは、正しい知識を得て多くの人にハンセン病問題を自分ごととしてとらえて頂けるように活動していきます。

【長谷川 綾】

今回、約半年にわたり、ハンセン病問題について多くのことを学ばせてもらいました。病気の症状や、ハンセン病回復者の柴田すい子さんにインタビューさせてもらい、ハンセン病になった時の心情や受けてきた差別などについて聞かせてもらいました。

私は、全く無知の状態から始めたので、「ハンセン病とは？」から学ばせてもらいました。

インタビューの時も、最初はどこまで踏み込んでいいのか戸惑いましたが、どんな質問でも柴田さんは優しく、詳しく教えてくださり、とても勉強になりました。

そんな柴田さんのためにも、私は若い人に対してハンセン病問題について知ってほしいと思うようになりました。これから私たちは、ハンセン病問題について詳しく知らない人達にどのようにアプローチしていくかを考えていきたいです。そして、この差別について皆が1人1人意見を持ってもらいたいです。

【森 怜奈】

私はこの活動を始めて、ハンセン病問題について初めて深く考えることができました。最初は何も知らない私たちでしたが、インタビューを通して、すい子さんと関わり、当初に比べ、たくさんの情報を得ることができました。そこから、私はこの活動で得た情報を誰かに伝え、これからも誰かの、できればすべての人の心に少しでもハンセン病問題の知識、行われた差別について残るようにしたい！と思いました。ここから、私たちは三人で話し合い、これからも活動を続けていくことにしました！

少しでも私たちの活動が広まり、同時にハンセン病問題について広がることを願って活動していきたいと思います。

最後に、協力してくださった、柴田すい子さん、国立ハンセン病資料館の方々、聞き書き甲子園事務局の方々、この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。



profile

柴田 すい子

しばた すいこ

1936年7月2日・85歳

ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会副会長

【略歴】1936生まれ。神奈川県出身。1951年に多磨全生園に入所。

1955年に長島愛生園高校を設立し、1期生として入学。

1968年にハンセン病回復者である夫と社会復帰。パートで7年間程働き、37歳頃から社会福祉法人東京コロニーに就職。定年退職まで働く。現在は社会で暮らし、国立ハンセン病資料館運営委員に就任している。

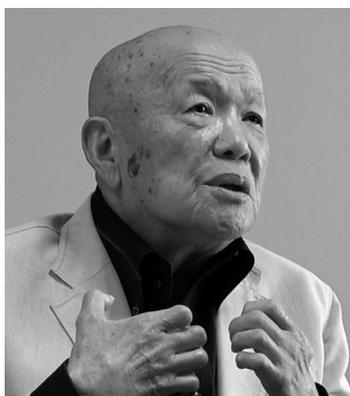
命をかけた怒り

語り手 豎山 勲 たてやま いさお

ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会事務局長

■ハンセン病患者の家族

私は豎山勲。昭和23年1948年11月28日に鹿児島県大口市という町で生まれました。父親、母親、それから五人兄弟の私は末っ子です。母親はハンセン病でした。しかし、私は母親がハンセン病だったということ、ハンセン



病っていう病気の名前を知らなかったです。学校で習うこともないし、教えてくれる人もいない。ですから、強制隔離をされた後、母親が私と同じハンセン病だったんだということを知ったんですね。しかし、村中の人たち私が私を避ける。私の家を避ける。偏見や差別が我が家を襲っておった。それが故に兄も姉たちも、みんな故郷での勤めを辞めて県外へ逃げざるを得なかった。だから我が家は一家離散みたいな状況に追い込まれていった。そしてまた、村の中では村八分みたいな状況があったかと思うんで

聞き手 東京都立国際高等学校 3年

井口 夏萌 内村 颯花 丸山 莉加

す。不思議さはあったけれども、そういう中で生活していったんだね。ところが小学生の5年生、6年生頃には私にもハンセン病の症状が出た。それはハンセン病に起因する神経痛であったり、熱こぶであったりという症状が出始めたということなんです。そういうことがあって、村の医者へ行つてですね、診察をしたら、単なる神経痛つてことで片付けられて、それがハンセン病に起因するものだという事は誰も教えてくれなかったですね。

家にいた母親は、私が12歳のときに痰が喉に絡んで窒息して、私の目の前で死んでいきましたね。父親は苦しむ母親を見てすぐに町医者まで呼びに行つたんですけど、医者が来た時にはすでに母親が死んだ後だったということなんです。ハンセン病患者つていうものは一般の病院で診られない。強制隔離しかなかった。治療を受けようとするのであれば、療養所の中でしか受けられない。だから、強制隔離つていうのは私たちがハンセン病患者だけを隔離したのだけではなくして、医療までも隔離してしまつた。強制隔離という仕組みが、母親の命を奪つてしまつたということだと思つてですね。

■強制隔離直前の出来事

私は中学2年生の9月5日に強制隔離されたわけですよ。その前の3日、星塚敬愛園の人だとかがやってきて父親と話をしていた。それが隣にいる私の耳に入ってきた。その人たちは父親に対して「母親は隔離の対象であったのに、入所をさせなかったが故に母親を死なせた。それは父親が殺したも同然だ」と責められている。「この子を死なせてもいいのか」と、壁の向こう側で言ってるわけですね。そして、4日の晩に、「明日、鹿屋に行つて来い」ということを父が言ったんですね。父親がそれ以上のことを言わない。何も聞くことができないくらいに張り詰めた空気があったんですね。そして、9月5日の早朝に迎えるタクシーが私の家から離れたところで待っていたんですね。そこへ行く道々ね、私は父親が「功、もう行かんでいいよ」と言ってくれるんじゃないかと思って、父親の顔を見上げながらその道のりを歩いておりました。ところが父親は私の顔を見ようとしないんですよ。強制隔離されていく我が子を親としてどうすることもできない。親としての不甲斐なさっていうのを感じたと思うんですよ。そういう状態の父親を見たのは私初めてでした。いつも強い父親を見ているわけですが、その父親が何にも言わない。その時の父の姿は未だに忘れることはできないし、父と別れた場所に行くと、今でもそこに父がいるんじゃないかって私は思うんですよ。私はタクシーに「乗れ」って言われた通りに乗る。そしてそこで「父ちゃん行ってくるね」って言っても父親は一言も言わない。私の目も見えない。私がある場所を敬愛園へ向かって出発していくわけですけど、私が連れ去られた後に、その場で男泣きをしたのではないかと思うんですよ。

■施設で初めにしたこと

タクシーから降ろされた後、私は別館というところへ連れていかれて、そこで私に聞かれたのは「豎山お前は名前を何にするか。ここではな、名前を変えなくちゃならないんだ。そうしないと、お前の親兄弟、親戚みんなが迷惑するんだ」って、まず言われたんですね。「何と変えたらいいんですか」と聞いたらね、目の前に一本の印鑑があった。それを係官がパッと見て、「田中っていう印鑑があるから、今日からお前、田中にしろ」といわれて。その印鑑を私に渡されたんですね。偽名の強要がなされた瞬間だったんですね。そして、私に「遺体解剖承諾書」が渡された。入っていくなり、死んだ後の話をするわけですよ。怖かったですよ。その頃っていうのは、自分が死んだあとでどうなるんだろうということ、もう怖くて眠れない。そういう時に遺体解剖承諾書に署名して、こっちに渡せっていうんですから。もう手が震えましたね。そして、それに名前を書いて、印鑑を押して係官に渡しました。

■療養所の人々

同じ宿命を背負ったっていうんですかね、みんな同じように苦しい思いして、いじめられて療養所の中に投げ込まれるわけですよ。そしてらね、みんなもう療養所の中に入ったら親兄弟みたいなもので。自分よりも歳上の人たちを、お父さんお母さんお兄さんお姉さんって呼びよったんですね。だから私が少年舎に入ったその日からお父さん代わりお母さん代わりという方ができたんです。まるで家族みたいな形で園の方が運営されていくわけですよ。お父さんお母さんをあてがわれたら、その者たちに迷惑をかけたらいかんっていう思いになるじゃないですか。そしてら園の側にとってみたら管理運営上、その方がいいわけですよ。だから療養所ってい

うのは、本当の家族を奪って、そして療養所の中で新たな家族構成を作っていたんですね。

■完全隔離の生活

療養所の中っていうのはもう隔離ですから。外に出ることも許されないわけですし、自由がきく場所でもないわけですから、全てのことに対して規制があるわけですよ。やりたいことがあっても、それはできないっていう現実がそこにあるわけですね。だからもう最初っからやりたいことなんて考えないんですよ。諦めが先ですよ、全てのことにはね。

■少年舎時代の思い出

少年舎には私たち小学生、中学生が寝泊まりする部屋が3つありました。そして食堂があつてトイレがあるっていうような感じですね。私たちが寝る部屋っていうのは12畳半の大部屋でした。私がいた部屋には4人いて、小学5年生と3年生の男の子がいたんです。子どもたちですから新患さんが入ってくるのは珍しくて、「お兄ちゃんどっから来たの？」とかかつて言ってきた、そして夜寝るときは私の布団の中に入ってくるんです。だけど、その男の子たちが、夜になると泣く時があるんですよ。やっぱりふささとのことを思ったり、お父さんお母さんのことを思うんだろうと思うんです。だからその子たちを両脇に抱えて眠っておったっていうのが、少年舎時代の悲しい思い出ですよ。

■隔離の中の隔離の高校

私は中学校を卒業した後、岡山県の長島愛生園っていうところにあるハンセン病患者だけの高校へ行きました。長島愛生園は島の中の療養所なんです。今は橋が架かっていますけども、当時は全くの島だった。船で渡らな

くちゃいけないとこだったし、それだけに隔離の中の隔離っていう感じでしたんですよ。やっぱりそういうことで苦しんで、海に身を投じて自殺された人もいらつしやいました。国はそういうところにハンセン病の療養所をつくったんです。それは患者の逃亡を防ぐためです。島の中に高校をつくるっていうことは、それだけでも教育上はよろしくないですよ。高校をつくるのであるならば、隔離っていうんじゃないで、なんかこう未来に希望が持てるようなところに本当は作るべきですよ。

■先生に反抗し続けた青春時代

私たちは基本的に外出はできなかったもので、小学校、中学校、高校時代も修学旅行がない青春だったんですよ。だから私たちの1級上の先輩の人たちはね、修学旅行に行かせてくれたって学校側にかけあったわけですよ。そしたら、修学旅行は許可することが出来ないこと見事に断られてね。ですから学校の先生方が敵に見えたですよ。恩師じゃなくして敵ですよ。自分たちがこうしたいって言っても、それを一方的に押さえつける訳ですから。教育の現場でありながら教育の現場でない。差別そのものの現場ですから。だから学校の先生方に対して反発はしましたね。

■コロナ社会とハンセン病差別

今のコロナの社会状況とハンセン病の差別がたどってきた道は全く重なります。

コロナの患者さんに対する感染症法。コロナに罹患した人がもし入院を拒否したら、罰金がとられるんですよ。コロナに感染した人がなぜ入院を拒否しなくちゃいけないのか、そのことをまず、知るべきじゃないですか。拒否しなければならぬ理由があるとすれば、拒否しない方がいいような環境をつくってやる、それが行政のやる仕事ですよ。

コロナに罹ったらもう差別が始まるんです。病人も人間ですよ。その人としての権利を奪うようなことをして、いいはずがない。医療の現場にこそ、私は人権が必要なんだって言ってるんです。こういう病气っていうのは慎重に事を進めていかないと、偏見や差別を生み出して行って、そしてそれが取り返しつかないようなことになってしまう。ハンセン病問題からもっと学ぶべきだと私は思う。

■ 豎山さんの原動力

私の原動力はね、父親の流したであろう涙ですよ。国の間違った法律によって親と子の絆がズタズタにされていく、そして私の人生も親の人生もズタズタにされていった。こんなことが許されていいわけがないんですよ。私は強制隔離をされていて、父親の死に目に会えなかった。だから土葬されて白骨化した父親の写真を見たとき、本当に父親を見たような気がしたんですよ。私にとつて、そのセピア色化した父親の頭蓋骨の写った写真が、愛おしく思えたんですね。「こんな思いを人にさせてたまるかいい」という思いが私の中にずーつとあるんですよ。

■ 今も残るハンセン病問題

残された課題があまりにも多すぎるんです。偏見、差別、隔離被害……。ハンセン病問題の中で、教育現場でハンセン病患者、またその家族が生徒だけでなく教師にも差別を受けたという事例がいくつも上がった。教師がハンセン病問題を的確に把握していたならば、差別を食い止めることができたと思っただけです。しかし、教師があまりにも知らなすぎた。教育の現場で一貫した教育を行っていかなくてはいかんだろうという思いがあるんで、現在の問題のひとつとしてハンセン病問題が教科書に載るよう文科省とやり取りをしています。

そしてさらに、強制隔離の場を私は共生の場にするという運動を今やってるんですね。私は、2004年に社会復帰しました。社会復帰をしましたっていうけど、社会復帰じゃなくして療養所を退所しただけ。復帰まで果たしてないと思ってるんです。復帰っていうのは、その社会に退所したその場で、その地域住民と一緒にあって共生できる、そういう場が本当にあるかどうかということだと思っただけです。まだそこまでいってないと思ってるんです。

■ 豎山さんの決意

ハンセン病問題の全てのステージで、最前線で動いてきたのは私以外にいません。だから、すべてのことを私が見てきた、解決するために私が先頭に立たせていただいた。そういう現実がありますから、それから逃げるわけにはいかない。死ぬまで私はその最前線で、戦っていかなくちゃならんだろうと、そう思っております。私たちが苦しんできた道を、他の人たちに同じ思いをさせたくない。その苦しみを味わった者として、絶対しちゃいけないと思うから命を張るんです。だから、ハンセン病問題の全面解決への道を、ひたすら歩き続けることだろうと思います。



検察に菊池事件の再審を請求する豎山さん

〔取材日 2021年2月13日〕

【聞き書きを終えての感想】



お話を聞き、豎山さんが病気を患った当時、ハンセン病について適切な知識を持った人が少なかったことを知りました。そのため、強制隔離などの差別が助長されるような政策が取られていました。しかし、ハンセン病についてより詳しく解明された今でも一般市民が持つハンセン病に対する知識はあまり多くありません。そのため現在でも根強くハンセン病に対する差別意識は残っています。一度築かれた差別意識は時間が経っても解決されるものではありませんが、多くの問題は次々と生まれてきます。そのような状況を嘆くだけでなく、今の自分にはまず何ができるのかを考えて行動に移すことが、何よりも問題解決に早いことを豎山さんのお話を聞いて気づくことができました。ハンセン病の問題は今を生きる私たちに通じる部分が多くあります。貴重なお話をしてくださった豎山さんには本当に感謝をしています。豎山さんの「自分と同じ思いを誰にもさせたくない」という思いは、聞いたお話を基に私自身の社会問題に対する取り組みへ反映させていきます。(丸山 莉加：写真左)

私は無知・無関心は罪だと思いました。ハンセン病に関する正しい知識を知らない無知によってハンセン病差別は起こり、ハンセン病の歴史は過ぎたこととして目を向けようとしない無関心によってハンセン病差別はいまだに続いています。豎山さんが仰った「然るべき人から話を聞かなければいけない」という言葉のように、歴史を正しく知るためには当事者からお話を伺うのが一番だと思います。しかし現在の歴史教育ではそのような機会がなかなかないと感じます。そのため、差別をなくすために豎山さんが行っている教育改革はとても重要ですし、これから先は私たちが豎山さんの代弁者としてハンセン病問題の事実をさらに広めて無知・無関心が蔓延するこの日本社会を変えていきたいです。そして豎山さんのように常に鋭い視線で社会を見つめながら生きていこうと思います。(内村 颯花：写真中央)

私はハンセン病差別は今も残っており、それによる被害者・被害者家族の痛みは決して癒えないものだと思います。今までハンセン病問題は解決した過去の問題だと思っていましたが、この問題は現代まで続く日本の大きな問題の一つだということに気づかされました。今、コロナが流行り、それに関連した人権被害が多く起こってしまっています。お話を伺っていく中で、感染症に付随する差別はいとたやすく生まれ、なかなか消えることがないということを知りました。今こそ、私たちはハンセン病問題がどんな道のりをたどってきたのか、どんな被害を生んだのかを学ぶ必要があります。豎山さんは、強制隔離後から、自身の置かれている状況にただただ耐えるわけではなく、常に疑問を持って戦ってきた方です。私は、豎山さんのように声を上げることでより良い社会を作っていく、そんな大人になりたいと思います。(井口 夏萌：写真右)



profile

豎山 勲

たてやま いさお

1948年11月28日・72歳

ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会事務局長

- 【略歴】 1962年9月5日 国立らい療養所星塚敬愛園に強制入所
1964年4月 岡山県邑久郡邑久町国立療養所長島愛生園に転園
2001年4月14日 全国原告団協議会設立。副会長
2001年5月11日 判決。原告完全勝訴

未来へのバトン　　その時まで、私たちが

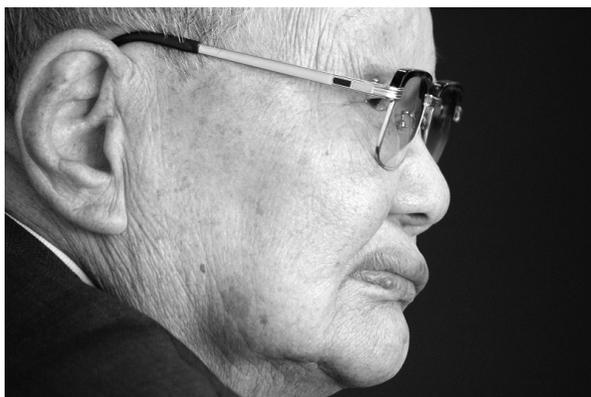
語り手 **中尾 伸治** 長島愛生園入所者自治会会長

聞き手 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

藤尾 菜津　　長谷川 てまり
山中 彩也花　　池田 和音
原田 菜里　　岡田 有莉
松葉 悠乃

■愛が生きる場所「長島愛生園」

ここは、瀬戸内海の小島にある国立ハンセン病療養所長島愛生園です。現在126名の回復者の方が暮らしており、平均年齢は87歳です。また、園内には回復者の方と食事ができる、さまざまなハウスという場所があります。そこから見える、島を囲む瀬戸内海の景色は、とても美しく穏やかです。ですがその美しさの反面、かつてここにハンセン病患者を終生絶対隔離した差別の歴史もあります。現在も差別の象徴といえる歴史的な建物が残っています。私たちは、いつもこの長島愛生園を中心にハンセン病問題から学び続けています。園内フィールドワークや、回復者の方とお話をするなどの交流をしています。私たちは長島愛生園と回復者の方々が大好きです。それではこれから私たちが聞き書きを行った長島愛生園入所者自治会長を務める中尾伸治さんのお話をご覧ください。



■自己紹介

僕は昭和9年（1934）の7月13日に奈良県に生まれました。現在86歳です。今は、長島愛生園の自治会長をしています。



中尾さんの少年時代

■旅行気分で愛生園に

僕は昭和22年（1947）の夏頃に発病して、大阪大学皮膚科で診察してもらいました。先生が愛生園に一緒に行こうということで、約1年通っていました。病気になってからもごく普通の生活をさせてくれました。愛生園に来たのは昭和23年（1948）6月、14歳の時です。学校で校長室の掃除をしたんですけど、「すぐ帰りなさい」という放送がかかったので、帰りました。家に帰って何事かと思いい母親に聞いたら、1週間後に愛生園に行くんだと伝えられました。

深夜に普通列車で大阪を出て、岡山に6時ごろについたんです。迎えが来るのを待ってたんですけど、なかなか来ないので、後楽園^{注1}で遊びました。それから愛生園に入って来ました。苦しい思いをしながらお召し列車^{注2}という特別列車にのせられて来た人たちと比べたら、旅行気分です。生園に入って来たと思います。

注1）後楽園

岡山市北区にある日本庭園で、日本三名園の一つ。世界に誇る文化財として知られている。

注2）お召し列車

本来は天皇専用の特別列車のこと。ハンセン病者は特別車両（列車）で療養所に収容されてきたので、収容された入所者たちが皮肉を込めてそう呼んだ。

■入所してから

虫明^{注3} 港から船で行って、愛生園に着いた時、回春寮^{注4}に入ります。普通は中に入ってきたら、消毒風呂^{注5}に入るんですけど、私は子どもだったので、入浴の代わりに看護婦さんに体を拭いてもらいました。ほかの人たちと比べたら、気楽に入ったということになります。そして、少年舎に入りました。社会で生活していた時は隠れたり、はずかしめにあつたりしながら生活していました。しかし、ここはみんな同じ病気なので、普通の子どものように、騒いだり、泣いたり、喧嘩したりしながら、18歳まで生活しました。僕の先輩たちは段々畑でジャガイモを植えたり、夏になったらサツマイモを植えて、自分たちのおやつにしています。園内には乳牛が数頭おりました。作業は朝の8時頃から夕方4時ごろまでです。ミルクは給食部^{注6}のほうに納めます。そのミルクは病棟に入室している人たちに、おやつ時間に配られていました。そこで3年ほど働いて、その後は、自治会と一般作業場を行ったり来たりしていました。

注3）虫明

岡山県瀬戸内市邑久町の一区

注4）回春寮

入所する際、まず回春寮という建物に入れられた。

ここでは、身体検査と入所の手続きをした。園が必要ないと判断した持ち物はすべて没



取された。家族と縁を切るという意味で園から偽名をつけられた方もいる。

注5) 消毒風呂

入所者は「汚いもの」として扱われ、クレゾールという薬品の入った浴槽に入れられた。

注6) 給食部

職員と元気な入所者がご飯を炊いていた

■「変わつたらんじやないか」

昭和27年(1952)ごろに初めて一時帰省しました。兄貴が病気になるまで、秋まで百姓の仕事を手伝っていました。

数か月で帰る予定だったんですけど、家の手伝いがあるので、園長先生に延期させてくださいと手紙を出し、家事がすむまで実家で生活しました。帰った時おばさんが見舞いに来てくれたんです。その時のおばさんの第一声は、「なんや、変わつたらんじやないか」って。ハンセン病は指が曲がるなどの症状がありますが、僕はちつとも変わっていないかったので、おばさんたちも普通の生活しとるんじやなって思っていました。

■故郷を思い出す

僕は少年舎を出て、牛舎で働いていました。山を越えたところにあるんだけど。その谷間は故郷を思い出させてくれる場所なんです。だから僕はその場所が好きやね。

その日生町注7)に列車が来るようになり、汽笛が聞こえるんです。それを聞いたら、「家に帰りたい」という気持ちを掻き立てられた。いまだに忘れられないところです。

注7) 日生町(ひなせちょう)



牛舎で働く中尾さん

現岡山県備前市

■「おまえはいい時にきたな」

当時はお米が少なかったもので、うどんなどの代用食をよく食べていました。ひどい時にはメリケン粉(小麦粉)だけの時もありました。それをどうしていいかわからなかったから、七輪で火をおこして、糊を炊いて、塩や砂糖をかけて食べていました。

夕食にはそういう代用食が多かったね。それが当時の僕にとってはきつかった。でも、それを先輩たちに言ったら、「おまえはいい時にきたな」と言われました。それ以前の人たちの夕食は、ほとんどおかゆだったと後に聞きました。戦前の人たちは本当に貧しい生活を送っていたんですね。だから、山を開墾して、畑を作って、芋や野菜を育てていました。今はおいしい食べ物は何不自由なく食べられるから感謝しないといけないね。

■中尾さんのオリジナルレシピ「牛乳ご飯」

出産したばかりの牛のミルクは1週間ほど出荷できないんです。それは、脂肪分量が多くて、ミルクを沸かすと脂肪分と水分が分かれるので、出荷できませんので浮き上がった脂肪分に醬油をかけて食べました。いまだに、ごはんとおかずが合わなかったら、ミルクをごはんにかけて食べています。ぜひやってみて。マヨネーズより牛乳の方がおいしいよ!

■風邪をひいた時はこれ!!

花梨注8)の木があるじゃろう。ちっちゃいけどね。その実を焼酎付けにして、飲むと喉にいいよ!風邪を引いた時はおすすめ!

注8) 花梨(かりん)

バラ科の落葉高木。咳止め効果があるので、花梨酒などに利用されている。

■故郷・奈良

東大寺二月堂の修二会^{注9}という行事を何度か見に行ったことがありません。皆さんの健康を祈って大きな松明^{注10}が焚かれます。僕たちはその燃えかすを拾って家のおくどさん^{注11}に飾ります。愛を感じるから懐かしかったですね。今はなかなか行かないから記憶が薄れていきます。

注9) 修二会(しゆにえ)

東大寺で行われ「お水取り」「お松明」などと呼ばれ親しまれている、春の訪れを告げるお祭り。752年からの伝統行事で、現在まで途切れることなく続けられている。

注10) 松明(たいまつ)

明かりとして使うために手で持てるようにした火のついた木切れなどである。

注11) おくどさん

京都の方言で「かまど」という意味

■「もう帰らんといてくれ」

兄に子どもができたとき、故郷である奈良に呼びつけられました。

兄が「今日は家に連れて行かん。旅館に泊まってくれ」と言ったので、その晩は一緒に食事をしながらいろんな話をしました。そして最後に「子どもが生まれたから、もう家に帰らんといてくれ」と言われました。愛生園に入所した人のほとんどは、家族との縁を切り、名前を変え、本籍を抜いてしまうことを聞いていましたから、僕はその言葉をすぐに受け入れました。現在も家に帰っていません。

兄が亡くなったことを知ったのは、奈良県が主催している里帰りに参加した時です。その時のガイドさんが教えてくれました。そのガイドさんは、私の家の近くに住んでおられて、僕が入院した時から知っていたそうです。僕のように音信が途絶えてしまっている人はたくさんいます。

■大水害

昭和51年(1976)の9月に1週間に900ミリの雨が降って、愛生園に来る道路も皆つぶれてしまった。現在は、団地になっていきますけど、かつて望が丘^{注12}の下が野球のグラウンドだったんですよ。そこに向けて土砂が流れ、埋まってしまった。住宅やお寺がつぶれ、愛生園の電気は全部止まってしまったし、水道が全く出てこなくなっていました。だから、新良田地区へは水や食料は船で運んできた。でも、一家族にやかん一杯の水しか配給はなかった。それで毎日カップヌードルばかり食べとったので、いまだに「カップヌードルはもういいわ」という感じ。

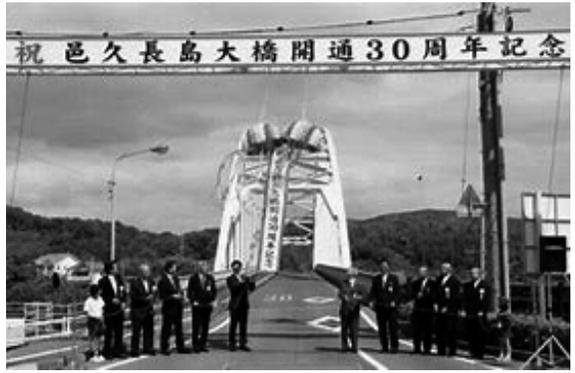
それから国が復旧作業をしました。復旧作業は約5億円かかりました。親しい友だちの家は、天井まで土が入るような事故でした。今はその場所に住めないのです、公園になってます。僕の家は大丈夫だったんだけど、体調不良でしたが、スコップを持って毎日走り回ってました。水道が止まっていたので、服を洗濯する時は山から流れてきた水を使いました。すると、生地の中に砂が入って、乾いたら服からじゃりじゃり砂が落ちていました。その乾いた服を着て働きました。

注12) 望が丘(のぞみがおか)

子どもたちが暮らした地区は「望が丘」と呼ばれた。正式な学校ではなかったので、教員免許のない入所者が教員となり、教育を教えた。

■感動の再会

この架橋の渡り初め式をメディアが取り上げました。そのメディアにたまたま写ったことがきっかけで、おふくろと連絡を取ることができました。僕が「迷惑かけてないか」と聞くと、「お前の元気な姿が見れて良かった」と言ってくれました。また、架橋30周年を迎えた際、久しぶりにい



渡り初め式の様子



ピラ配りの様子

こちら手紙が届きました。

■架橋運動

まず橋を架けたいというのは昭和46年（1971）くらいに光明園が、人間が通れる橋をつくってほしいと言ったのが始まりでした。町の方へ陳情するんですけど、認められなかった。橋を架けるなら、大きな大きな橋をつくってもらおうということで、合同委員会が昭和50年（1975）ぐらいに作られ、町に要請を出しに行ったりしました。でも、その中で「そんな橋なんて架けんでもええ」「汚いのがぞろぞろ上を通る」という声がかかる時もありました。でも、「人権回復の橋を作ろう」という思いで、自分たちもピラを作り、地元で撒きに行きました。嫌がられることやぶち投げられることもあったけど、それでも配り続けた。しかし、架橋まで17年も



棧橋（2016年撮影）

かかってしまいました。

■世界遺産登録に向けて

棧橋はどんどん崩れていってしまっているんです。本当に悲しい。復旧するなら、今ある棧橋と同じところにつくると世界遺産登録に対してそれが邪魔になる。だから、別のやつつくるとしても、橋の近くに再現するということになると思います。僕は朽ちていくのも一つの歴史かな。でも残ってほしいという思いも半分あります。

■魅力いっぱい十坪住宅貯金箱

かつて、愛生園には陶芸専門の人がおって、お茶碗や、生活用品を作っていました。十坪住宅^{注13}の貯金箱はその人たちが作ったものです。僕は、



十坪住宅貯金箱

園内の庭に捨てられとったやつを拾って、それを真似て陶芸クラブで作ったことあります。現在NPO^{注13}の方で世界遺産運動をやっていますけど、NPOの方が活動に十坪住宅貯金箱を利用しようということで作ってます。昔の貯金箱はお金は入れられるんだけど、出すところがなくて、壊さないといけません。今、プロの人が作るとるやつは、お金が出せるように底に蓋がついています。

注13 十坪住宅（とつぱじゅうたく）

戦後も、入所者が増えて住宅が不足したため、寄付を募り建てられたのが十坪住宅。

注14 NPO

NPO法人ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会

■「顔が見えるように、そして手が見えるように」

僕は小、中、高等学校にお話に行ったりします。岡山県が主催して、年に10校ほど予定されるんですけど、その中の6校は愛生園が持ちます。残りの4校は隣の光明園が持ちます。今年はコロナウイルスの影響でほとんど行くことがなくて。自分のことや家族のことをみんなにさらけ出すのは少しづらかったんで、最初はできなかつたけど、ハンセン病の人がもう町の中に居らんでしょ。しかし、ハンセン病に対する偏見差別は非常に強いんだよね。

例えば、昔の話だけのお店でコーヒードと言って出されて、飲んでみる

と醤油が入ったり、食事をしようとしたら「閉店です」と断られたり、「店に来るな」と言われたりもしましたね。ハンセン病というのはいつも隅っこに追いやられるのです。そういうことをなくしたいという思いで語り部活動を始めました。

語り部をする際は、顔が見えるように、そして手が見えるように工夫しています。病気そのものを知ってもらわなければならぬからね。愛生園に勤めていた職員でさえ、娘さんが結婚するという話が破談になったりしていました。

病院に勤めとる人が偏見差別を受けるといふそんな馬鹿な話はない。今コロナでもそんなことが起こっていますね。同じことが今コロナでも起きているということに僕はがっかりしています。

以前、京都の先生から「ハンセン病そのものや、ひどい差別が起こっていた昔の状態がそのまま伝えられない。どうしたらいいですか」という相談を受けたことがあります。僕たちは直接差別や偏見を受けながら生きてきたから、当時の様子を正しく伝えることができる。かといって、僕が全国を回って伝えるわけにもいかないしね。ハンセン病問題が終わったと思われている今の社会で、どうしたらうまく伝えられるかな？一緒に考えてほしいな。

【聞き書きを終えての感想】



中尾さんは、明るく笑顔が素敵な方でいつも時間いっぱい話してくださいました。お話の中で中尾さんは、桟橋が短くなっていることについて、ハンセン病の歴史がなくなっていくようで、悲しいとおっしゃいました。建物の老朽化が進む今こそ、ハンセン病問題や歴史について考えることが大切です。

また愛生園が世界遺産に登録されることでハンセン病問題が日本だけでなく、世界の問題になると思います。だから、私たちの活動の視野も世界へ広がっていかないといけないと感じました。

中尾さんのお話を通して、私たちは、過去の過ちを繰り返さないために、ハンセン病問題から学び、誹謗中傷をせず、誤った情報を鵜呑みにしないこと。そして、問題に無関心にならず当事者としての自覚を持つことの大切さを学びました。だからこそ必ず、私たちが中尾さんの思いを伝えてつなげていきます。話を重ねるごとに笑顔や他愛もない話が増えていくことが毎回楽しみで嬉しかったです。

中尾さんとの時間は私たちの大切な宝物となりました。中尾さん、そして聞き書きプログラムに関わってくださったすべての方々にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

おまけコーナー

家の庭に畑があるんですけど、そこに木を植えました。去年はさくらんぼを植えました。すごくきれいな色に育っていました。あんずの木はすももぐらいの大きな実ができます。種が取りやすく、美味しいんですけど、鳥に先に食べられちゃうんですよ。だから僕は小さい方をいただきます。



植物を育てる中尾さん



中尾さんとヒューマンライツ部（2017年撮影）



西岳海撮影

profile

中尾 伸治

なかお しんじ

1934年7月13日・87歳

長島愛生園入所者自治会会長

【略歴】 奈良県に生まれ、昭和23年（1948）14歳の時に愛生園に入所した。

スポーツ好きで卓球・野球をして18歳まで過ごした。1988年5月9日に架橋した「人権回復の橋」と呼ばれる邑久長島大橋は、入所者が命がけて勝ち取った命の橋。架橋への思いを各地で訴え、ピラを配り続けた。

現在、自治会長として長島愛生園の世界遺産登録に向けて活動している。

記憶し、記録し、継承する

森和男さんと、過去、今、未来を見つめて

語り手

森 和男

大島青松園入所者自治会会長
全国ハンセン病療養所入所者協議会会長

聞き手

盈進中学高等学校ヒューマンライツ部

酒見 知花

伊藤 咲夢

延 泰世

野田 百花

瀬尾 啓生

川原 愛梨

日野 由唯

■ 差別の連鎖

小学校の3年生、9歳の時、顔に拾円銅貨^{注1}くらいの斑紋が出て、周りの同級生から変だとからかわれる様になったので、近くの病院で診てもらったがわからなかった。その後保健所に連れて行かれ、ハンセン病と診断され、翌日から登校できなくなった。こち



らから学校に行かないっていうんじゃないかって、学校の方から登校禁止。旧らい予防法は厳しい。医者が一旦ハンセン病と診断すると、感染者は全

員、療養所に隔離されることになっていた。勸奨とかそんな生優しいもんじゃないからね。嫌だと思っても嫌なんて言えない。戦後だけど、それなりに絶対隔離政策が維持され厳しかった。保健所職員から療養所に行くように勧奨される。拒否したらしつこいくらい何回も、何回も家に来るわけ。どうせ療養所に連れて行かれるって分かっているけど、決断はすぐできない。隣近所にも、毎日保健所の方が来てたら病気がことが分かる。そうすると、だんだん周りから嫌厭（けんえん）されるようになったね。そういうことから始まり、友達はみんな遊びに来なくなるしね。それで療養所に入ることを決めた。

注1）拾円銅貨：10円玉硬貨のこと。

■地元徳島の家族

両親は私が丁度入所する前に、戦後2人とも立て続けに亡くなった。お父さんが戦後、昭和21年ぐらいに、亡くなったんじゃないかな。1年後に母親が亡くなった。うちは両親が亡くなり大変な状況になった。そして私と姉が青松園に来たのは昭和24年（1949年）で、家が大変だった。1番上の兄は兵隊に行っていたが、まもなく2年くらいで帰ってきた。

■幼少期の過ごし方

朝学校へ行って、授業を受ける。その途中で午前中の休み時間に治療して行かんといけない。私が入所したときには新薬プロミンが使用されていた。治療に出かけて行っても大勢の人が順番に注射をする。血管の中にう



大島青松園の正門の前で（2017年撮影）



園内を自転車で走り回る森さん

まく入れればいいけど、下手な看護師はなかなか入らないから大変だった。1本1本使い捨てではなく、針を変えて熱湯消毒して使うわけ。注射器はみんなガラスだったよ。

■邑久長島新良田教室ができた成り行き

私たち子供の入所者は、中学校より上の学校がないから、当時の自治会の代表たちは高等学校を2校くらい作ってくれと要求しとったわけです。でも結局は1ヶ所になって長島^{注2}にできた。長島は大島とおんなじような島にある瀬戸内3園^{注3}の療養所のひとつ。そんな所に作られてしまった。ほんとは入所者の自治会は東京に作って欲しいと言ってたけど、当時の厚生省^{注4}の施設長の人たちは、隔離しやすいからという思惑で長島に作ってしまった。東京あたりだと、入所者が勝手に外出して困ると思ったから。それから2年くらい経った、昭和30年（1955年）の9月、学校が開校することになった。その2年前に「らい予防法」が改正になった。教育の面では、入所者の中から先生の代わりになる人が勉強を教えてくれてたんやけど、正式に資格を持った先生が教えるようになってきた。療養所内には教育基本法に則った教育が行われるようになった。憲法や法律があったけど、今まで療養所内ではきちんと実行されていなかった。だから、大きな変化だった。

注2）長島：岡山県瀬戸内市にある国立ハンセン病療養所長島愛生園

注3）瀬戸内3園：瀬戸内海の島々に浮かぶ3つのハンセン病療養所の略

注4）厚生省：現在の厚生労働省

■新良田教室での思い出

先生の中には、そりゃ印象に残る先生もいるけどね。先生はやはり、感染を恐れ気苦労も多く、苦労したんじゃないかなと思う。生徒への接し方

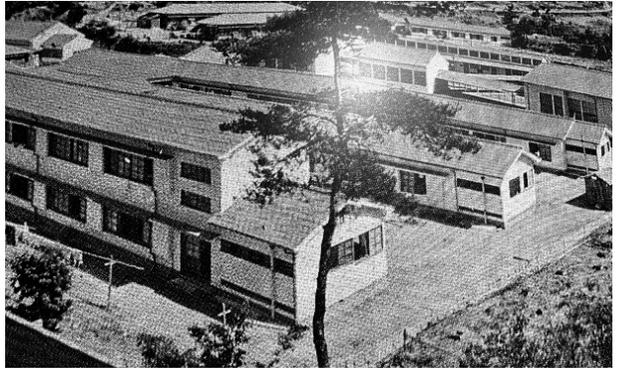
は、予防着を着て職員とおなじようにしなくちゃいけない。当時、長島の場合は看護師さんも先生もみんな同じような予防着を着ていた。頭からすっぽり帽子をかぶって、コロナウイルスの防護服に近い状況。その予防着を着て我々に接するわけです。それを更衣室で脱いで自分の私服に着替えて帰るわけです。石黒先生という先生がいて、同じ島の官舎に住んでるけど、家は島外に住んでいるような感じだった。別世界の人間のような感じがした。異邦人のような感覚だった。

それでも、先生にも個性がいろいろ出る。あんまり病気のことを気にしない先生もいれば、気にする先生もいたし、さまざまだったね。人間同士の付き合いをしてくれる先生もいたしね。気さくに接してくれた先生もいたけど、教頭先生のように厳格な先生もいた。

英語を教えてくれた星野先生。大島では英語なんかは中学校の頃、十分に教えてもらってなかったから、厳しくやられた。数学も厳しい先生で大変だったね。でも、長島で過ごした期間というのは非常に貴重な時間であったわけです。

■卒業してからの進路

1期生も2期生も高校を卒業したらとりあえず自分が出てきた出身の園



当時の新良田教室 提供：長島愛生園歴史館

に帰らなければならなかった。私も園に帰った。その後、社会復帰か、進学するか、かなり悩んだけどね。大学に入る場合は、差別されるから、療養所から来たっていうことがわからないようにするっていうことがまず前提だった。だけど出身の高校の経歴を変えるわけにはいけませんよ。内申書もいるし。自分が入学願書を揃えて、大学に提出するわけだから。卒業証明書と内申書さえあれば、大学はそこまで詳しく調べないからね。強いというなら、成績証明書と健康診断書の合計4つぐらいだね。健康証明書は、私立の病院でなくて公立。健康診断の診断書はいくらなんでもね、大島ではだめだからね。徳島に行つてわざわざ診断を受けた。就職活動は、ほとんどしてない。ゼミの先生から、就職先は紹介された。我々の時代は、国家試験を受ける人は、国家公務員とか、受ける人は受けていた。それから病気が落ち着くのを待った。

私は大阪へ出て大学行って、しばらく就職して。でも、なかなかそううまくいかなかった。病気に気を遣いながら生活していたからストレスからだと思うが、体調が悪くなった。なかなか会社での社会生活は順調にというわけにはいかなかったね。そうやってる間に病気が再発したんだ。療養所以外の場所で治療を続けるべきなのかどうか迷ったが、大島へ帰った。最初は大島に通つてたつて感じなんだけど、もう長くは通えないので、大阪から引き上げて帰つて来た。

■大島の自治会長に

平成2年（1990年）から多磨全生園にある全療協本部へ中央執行委員として1年程出向していた。ちょうど、らい予防法廃止のことが進み始めた頃だったんですね。その後体調が悪くなり大島に帰った。大島で体調が治るまで治療を続けた。神美知宏^注と入れ替わるような形になって、しばらく自治会の仕事を休んでいた。そして、良くなってまた自治会の方



自治会の仕事をしている森さん



国賠訴訟時の抗議活動 提供：長島愛生園歴史館

で仕事を始めて、会長をせざるを得なくなって、それからずっと続いてきているわけです。平成26年に神美知宏が突然亡くなった。私が全療協の会長を引き受けて、それからずっと、現在に至っているところです。
注5) 神美知宏：森さんの義兄さんで、前全療協(全国ハンセン病療養所入所者協議会) 会長

■国賠訴訟

らい予防法廃止の2年後に予防法の違憲国賠訴訟があった。それは九州の療養所の入所者13人が熊本で起こした。その頃、私は自治会の代表として、厚労省との交渉のため、上京していた。国賠訴訟について各支部の中でどう取り組むか、意見が分かれていた。だが、全療協の会員のみんなが国賠訴訟に結集できるような形になると、私は思っていた。だが、自治会の代表をしている関係で、私は原告になることを控えていた。

■自治会の国賠訴訟への動き

意見が揃わない私たちに、結集しないと最後まで勝てないと弁護士から言われた。それで「もうやはり全療協全体で立ち上がるべきだろう」と立ち上がった。療養所の中にね、どうしてもそれに加われないという支部もありました。全療協にとつてのこういう大きな問題については全支部、全部の療養所の自治会が賛成して、組織として統一と団結をはかり運動を進めることが必要であった。でも、予防法の問題も足並みがそろわなかった。結局、全体の合意っていうのはね、得ることはできずに、全支部長会議でやっと全療協も一緒に戦おうということになった。それで最後に原告となった。大島青松園は瀬戸内海にある園ですから、岡山の裁判に加わった。最初、5年くらいかかると思ってたけれど判決が早く出るようになった。

■裁判の意味

我々が勝訴できたことは大きな意味があった。予防法廃止もそれなりの意味があったけど、それより国賠訴訟に我々が勝って予防法が憲法違反だったということになった。それをはっきりと裁判所で認められたのは大きかった。

■賑わいがなくなった療養所

10年前は100人いたのが今は45人だから、半分以上減った。そ



大島青松園の玄関口

ういうことで、我々もだんだん残されたものがなくなってきたるなあ、と強く思っているんですけども、いずれいなくなる療養所をどうするか、今から考えておかないといけない。私たちも長い病気の人生だったから、大体みんな終わりに近づいているわけで、そればかり毎日考えてるわけです。今後10年考えると厳しいかなと思ってます。

■これからの療養所のあり方

療養所がいずれなくなっても、社会復帰して社会で生活している回復者がいるので、その人がいることを考えると、療養所をすぐ無くすることができないんです。歴史を後世に語り継ぐことが大事なわけです。だからこの施設も、長島愛生園も同じなんですけど、人権学習とか、人権研修などの場所として、将来残していきたいという考えを持っています。今、例えば療養所を残す取り組みは、それぞれの療養所で考えながら取り組んでいく必要があるんだと思います。その地域ごとに特色がありますので、そうする必要があります。例えば、沖繩の愛楽園。その地域の人達のために残しておくのも、一つの考え方としてあるんです。だからその地域、地域にある療養所を取り潰すわけにもいかないのだと思うんですよ。長島には、邑久光明園と長島愛生園があります。光明園は、老人ホームが敷地内に設置されていますから、すぐには療養所に返すことにはならないと思うし、

長い時間、残していくことになるんだろうと思います。長島は長島で世界遺産登録の問題とか。療養所によって色々な事情、考えを取り込んでいかなければならないだろうと思います。東京の多磨全生園は全体を人権の森として、将来まで残しておきたいという思いで取り組んでいます。そのことについて地元の東村山市も異論がないようです。それで、人権学習、人権研修の場所として、これからの療養所のあり方、将来に渡って残そうという考え方はどの自治会も中心にして考えている。

■若者への願い

コロナ禍で、「大変だなあ」と思っています。勉強するにしても社会に出ていくための就職活動だって今は出来ないでしょう。人生の大事な時期にあるわけで、今日を大切に生きていってほしい。ハンセン病はコロナと同じように感染症です。私は、感染力が強く、差別されるコロナのような感染症はハンセン病に似てる場所があるんだと思っています。コロナのことは、こんなひどい状況になると、国がパンデミックへの準備が全くできていなかったと思います。国が国民に自粛を要請しているが、頑張って生きていってほしいと思うわけです。今はコロナや生活の面で大変だから自殺する人も多くなっていると聞いているんだけど、自分の命を大切にしてほしい。

【聞き書きを終えての感想】



この聞き書きプログラムを通して、私たちが聞き取ったのは、社会の厳しい差別・偏見を生き抜いた森さんの人生のほんの一部です。しかし、森さんのお話を聞いて、ハンセン病問題を、そして、森さんのことを忘れてはならないと強く思いました。私たちに何ができるか。当事者の手を握り、生の声を、思いを全身で聞き取り、後世へと伝えること。社会に根付いた差別は、国が「らい予防法」として作ったこと。そして、私たち市民は、国の情報を疑わず、批判もせず、患者を地域から追い出し、“終生隔離を推進する側”にいたこと。私たち市民が差別を拡大させたことを胸に刻み、物事を正しく知り、正しく行動する力を身につけていきます。

森さんの辛い、思い出したくもない記憶を私たちに打ち明けてくださったことは、当たり前ではありません。だからこそ、私たち聞き手も覚悟を持って、回復者の方々の人生、生きた証を伝えていきます。最後に貴重なお時間を頂き、お話ししてくださった森和男さん、このプログラムに関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。



森さんとヒューマンライツ部（2017年撮影）



profile

森 和男

もり かずお

1940年6月6日・81歳

大島青松園入所者自治会会長

全国ハンセン病療養所入所者協議会会長

【略歴】徳島県鳴門市出身。9歳の頃ハンセン病を発症し、同じくハンセン病だったお姉さんと共に大島青松園に入所。園内にある中学校を卒業し、岡山の長島愛生園にある邑久高等学校・新良田教室に入学。4年間の高校生活を終え、大阪市立大学に進学。その後商社に就職したが、体調を崩して青松園に帰ってきた。それからずっと自治会活動に励んでいる。